

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370542

研究課題名(和文) 発音されない照応表現の研究

研究課題名(英文) A Study of Unpronounced Anaphoric Expressions

研究代表者

島 越郎 (Shima, Etsuro)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50302063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の具体的成果は次の3つである。まず、省略箇所が発音されない統語構造が存在する場合と発音されない代用表現が存在する場合があることを明らかにした。次に、省略文の派生には、音声部門における削除操作と意味部門におけるコピー操作の方法があることを明らかにした。最後に、省略文と先行文に課せられる同一性条件には、残留要素の焦点化を認可する意味的対比条件と削除操作の適用に課せられる構造的同一条件があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I have proposed that an elided site involves either a null proform or an unpronounced structure. The former is assigned an interpretation through the anaphoric relation it bears to some other semantic object in the discourse representation. As for the latter, ellipsis is derived by either copying or deletion. Copying is the process that forms an appropriate semantic structure by copying into an elided site the linguistic material necessary to insure interpretation. Deletion is the process that derives ellipsis by deleting constituents under identity with other linguistic material. Regardless of whether ellipsis is derived from deletion or copying, an output is subject to the "semantic contrast condition" which demands that an elided phrase be contained within a constituent which contrasts with a constituent including its antecedent.

研究分野：英語学 統語論 意味論

キーワード：省略 照応表現 削除 コピー 構造的同一条件 意味的対比条件 焦点化

1. 研究開始当初の背景

省略文は、代名詞と同様、必ず先行詞を必要とする照応表現であるが、両者は異なる振る舞いを示すことが Hankamer and Sag [“Deep and Surface Anaphora,” *Linguistic Inquiry* 7, 391-426, 1976]の研究で示されている。また、その後の研究において、省略文と代名詞との共通点も指摘されている。本研究では、省略文と代名詞が示す相違点・共通点を様々な角度から考察することにより、発音されない照応表現に関する体系的理論の構築を目指した。

2. 研究の目的

- (1) 英語には動詞句を省略する動詞句省略文が存在する。従来、動詞句省略文の派生については、i)省略箇所が発音されない統語構造を仮定する分析と、ii)省略箇所が発音されない代用表現を仮定する分析が提案されてきた。動詞句省略文に関する様々なデータを分析することにより、動詞句省略文の派生に関する理論の構築を目指した。
- (2) 英語には、間接疑問文における疑問詞の後の部分を省略する間接疑問縮約文、時制を伴う動詞を省略する空所化文、原形動詞のみを省略し、時制情報は助動詞として残される擬似空所化文などの様々な省略文が存在する。動詞句省略文とその他の様々な省略文を比較することにより、省略文の派生に関する理論の構築を目指した。
- (3) 英語では、従属節の主語が主節の主語を指す代名詞の場合、時制節の主語は必ず発音され、空の要素にはならない。他方、イタリア語などのロマンス諸語においては、従属節内の主語が主節の主語を指す代名詞の場合、空の要素になる。更に、日本語においては、主語以外に目的語も空の要素になる場合がある。このような空の名詞表現の分布と解釈を考察し、発音されない照応表現に関する理論の構築を目指した。

3. 研究の方法

動詞句省略文を含む様々な省略文の特徴を以下の点から分析した。

- (1) 省略された箇所からの wh 移動の可能性を調べる。
- (2) 先行詞文内に himself 等の照応表現が生起する場合の省略文の解釈を調べる。
- (3) 省略箇所がその先行詞の内部に含まれる先行詞内包型省略の容認可能性を調べる。
- (4) 省略箇所の先行詞が一つの構成素を形成しない複数の要素となる場合の容認可能性を調べる。
- (5) 省略されずに残った要素がどのような特徴を持つかを調べる。
- (6) 省略文が従属節内に生起できるかを調べる。
- (7) 省略文と先行詞文の態の不一致について調べる。分析することにより、省略文の派生に関する理論の構築を目指した。

4. 研究成果

(1) 省略文の派生について

生成文法における省略文の派生に関する先重要な先行研究としては、Hankamer and Sag (1976)の削除分析、Williams [“Discourse and Logical Form,” *Linguistic Inquiry* 8, 101-139, 1977] のコピー分析、そして、Lobeck [*Ellipsis: Functional Heads, Licensing and Identification*, Oxford University Press, 1995]の主要部認可分析がある。Hankamer and Sag は、省略箇所には統語構造が存在するが、発音の段階でその構造が削除される分析を提案している。他方、Williams は、省略箇所には空の構造が存在し、意味解釈の段階で先行詞の構造が空の構造にコピーされる分析を提案している。また、Lobeck は、Williams のコピー分析を踏襲し、空の構造は指定部と一致の関係を引き起こす機能範疇の補部に生起しなければならないという認可条件を提案している。

本研究では、それぞれの分析の問題点を指摘した上で、省略文の派生に関する新たな理論を提案した。具体的には、省略文が削除により派生する場合とコピーにより派生する場合があると仮定し、これら2つの操作を駆動する形式素性が統語構造構築の単位となるフェーズの主要部に随機的に基底生成されることを提案した。この提案によると、動詞句省略文は削除操作により派生し、間接疑問縮約文、空所化文、擬似空所化文などのその他の省略文はコピーにより派生することになる。

この分析の下では、次に示す省略文が示す様々な共通点と相違点に統一的説明を与えることができる。

動詞句省略文においては助動詞要素が必ず残留要素となるが、間接疑問縮約文においてはならない。

間接疑問縮約文では島の制約効果が見られないが、動詞句省略文では見られる。空所化文の残留要素と擬似空所化文における助動詞の後に生起する残留要素は必ず焦点化されるが、動詞句省略文における残留要素は焦点化される必要は無い。動詞句省略文は1つの構成素を形成しない複数の要素を分離先行詞として取れるが、擬似空所化文と空所化文は取れない。動詞句省略文と擬似空所化文は従属節内に生起するが、空所化文は生起しない。動詞句省略文には後方照応制約効果が見られるが、擬似空所化文には見られない。動詞句省略文と空所化文においては that 節を含む省略が許されるが、擬似空所化文では許されない。

先行詞文中の any books 等の否定極性表現 any books が、動詞句省略文と擬似空所化文では肯定極性表現 some books として解釈できるが、空所化文では解釈できない。空所化文の主語に代名詞が生起した場合、束縛代名詞の解釈が可能だが、擬似空所化文では不可能である。

(2) 省略文と先行詞文との同一性について

省略文を考察する際に、省略箇所と先行詞の間にどのような同一性条件が要求されるのかを明らかにするという重要な問題がある。この問題に対して、Hankamer and Sag (1976) は、代名詞とは異なり、省略箇所はその先行詞と同一の構造を共有しなければならないと主張している。このような Hankamer and Sag の研究を出発点として、Williams (1977) や Sag [“The Nonunity of Anaphora,” *Linguistic Inquiry* 10, 152-164, 1979] が主張するラムダ演算子に基づく LF 構造の同一性条件、Fiengo and May [*Indices and Identity*, MIT Press, 1994] が提案する依存関係に課せられる構造的平行条件、そして、Rooth [“Ellipsis Redundancy and Reduction Redundancy,” *Proceedings of the Stuttgart Ellipsis Workshop*, 1992] により提案された焦点の認可に基づく意味的対比条件等々、省略文に課せられる様々な同一性条件が提案されてきた。

本研究では、省略文が音韻部門における削除操作より派生する場合と意味部門におけるコピー操作により派生する場合があると仮定し、省略文と先行詞文の同一性に課せられる新たな条件を提案した。具体的には、省略文がコピー操作により派生する場合、省略文中の残留要素により引き起こされる焦点化が要求する意味的対比条件が課せられ、また、削除操作により派生する動詞句省略文の場合、意味的対比条件に加えて構造上の同一性条件が課せられることを提案した。

この分析により、省略文が示す下記の様々な特徴を統一的に説明できる。

間接疑問縮約では、残留要素である疑問詞に対応する語句が先行文において具現化具現化しない場合がある。他方、動詞句省略では、動詞の目的語が疑問詞として残留要素となった場合、目的語に対応する語句は必ず先行文中においても疑問詞として具現化されなければならない。動詞句省略文において一般動詞が省略される場合、省略される動詞と先行詞が形態的に同一ではない時でも省略が許される。他方、be 動詞と助動詞 have が省略される場合は形態的同一性が要求される。省略される動詞句が先行詞の動詞句内に含まれる場合があり、この様な省略文は先行詞内動詞句省略文と呼ばれている。先行詞内動詞句省略の適用は全く自由ではなく、従属節である不定詞節内の主語を修飾する関係詞節内に動詞句省略を適用できるが、従属節である that 節内の主語を修飾する関係詞節内に先行詞内動詞句省略を適用できない。

間接疑問縮約文そのものが動詞句省略文の先行詞となる様な省略文が存在するが、そのような省略文では残留要素の一部が必ず焦点化されることにより省略文と先行詞文との間に対比の関係が成立することが要求される。

(3) 発音されない代用表現について

省略文を考察する際に、省略箇所何が存在するのかを明らかにしなければならない。この問題に対して、生成文法では、発音されない統語構造が存在すると仮定する分析と構造を持たない空の代用表現が存在すると仮定する分析が提案されてきた。

本研究では、動詞句省略文の派生として、音韻部門における削除操作による派生以外に、省略された動詞句に発音されない空の代用形が生起する派生も存在することを提案した。具体的には、省略された動詞句に基底生成された空のスロットが空の代用形に再分析されることを主張した。この提案によると、省略箇所と先行詞に課せられる構造上の同一性条件に違反する動詞句省略文は再分析された空の代用形により派生される。他方、間接疑問縮約文、空所化文、擬似空所化文は空の代用形による派生は許されない。

この分析により、省略文が示す下記の様々な特徴を統一的に説明できる。

動詞の目的語である that 節内の主語を修飾する関係詞節内における先行詞内動詞句省略の適用は、関係詞節が主語と隣接する場合は許されないが、外置により関係詞節が文末に生起する場合は許される。省略された動詞句内部から関係詞化により関係代名詞が移動する先行詞内動詞句省略文において、関係代名詞以外の名詞句が随伴される省略文が存在する。

省略された動詞句内部から wh 移動により疑問詞が移動する場合、残留要素が焦点化されることにより先行詞文と省略文が対比されていなければならない。

動詞句省略文の先行詞に再帰代名詞が含まれ、かつ、再帰代名詞を含む先行詞文と動詞句省略文が従属節を形成する場合、再帰代名詞が異なる個体を指すスロッピーの解釈と同一の個体を指すストリクトの解釈が同様に許される。他方、動詞句省略文の先行詞に再帰代名詞が含まれ、かつ、省略文と先行詞文が等位節を形成する場合、再帰代名詞が異なる個体を指すスロッピーの解釈に比べるとストリクトの解釈は困難になる。

動詞句省略文そのものが動詞句省略文の先行詞となる様な省略文が存在するが、そのような省略文では残留要素の一部が必ず焦点化されることにより省略文と先行詞文との間に対比の関係が成立することが要求される。

動詞句省略文と擬似空所化文では、省略を受けた文とその先行詞となる文が並列関係にある場合、両者の態は一致しなければならない。他方、省略文と先行詞文が並列関係に無い場合、両者の態は一致しなくともよい。また、間接疑問縮約と空所化においては、省略を受けた文とその先行詞となる文の態が一致しない場合は常に許されない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- 島 越郎、動詞句省略と形態的同一性、文化、78 巻 3/4 号、2015、査読無し
- 島 越郎、省略文に課せられる制限の考察：LF コピーと PF 削除による派生の観点から、東北大学文学研究科研究年報、64 号、27-51、2015、査読無し
- Etsuro Shima、A Unified Analysis of Left-Dislocation and Gapping in English、*Explorations in English Linguistics* 28、87-107、2014、査読無し
- 島 越郎、動詞句省略文における発音されない代用形、東北大学文学研究科研究年報、63 号、101-129、2014、査読無し

〔学会発表〕(計 2 件)

- 島 越郎、動詞句省略文の二つの派生：削除と空の代用形、第 86 回日本英文学会、2014 年 5 月 24 日、北海道大学(北海道・札幌)
- 島 越郎、比較標識と比較節の選択関係、第 33 回日本英語学会、2015 年 11 月 22 日、関西外国語大学(大阪府・枚方市)

〔図書〕(計 1 件)

- 島 越郎、開拓社、省略現象と言語理論、2015、249 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島 越郎 (SHIMA, Etsuro)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50302063